

---

# 異界の島への航海神話としての 『御曹司島渡』

松村一男

## —Abstract

Myths about unknown islands always fascinated island people. The most famous example is the *Odyssey*. The *Odyssey* was introduced to Japan in the middle of the sixteenth century by the Jesuits and gave birth to a story named the *Nobleman Yuriwaka*. Probably influenced by this story, another voyage story, the *Voyage of Yoshitsune to the Island of Yezo*, was created. The hero of the story is Minamoto no Yoshitsune. His tragic, untimely death made Yoshitsune one of the most popular legendary figures in Japanese history. Many stories have been created about him and this story is one of them. In this paper, the story will be explained and then a comparison with other voyage stories will be given.

## はじめに

神話は現実とは違う世界（異界、過去、未来、死後など）を対象とする思考様式である以上、神話は環境や状況から制約を受ける。異界にしても死後世界にしても、どのような環境であるかによって想定される風景は異なってくる。異界への旅という神話モチーフは、山岳民族であれば山中に、大平原の遊牧民族であれば、天空や地下界に、そして海に親しんできた民族においては異界の島への航海という形を取るのが一般的だろう。

移動手段の改善や地理的な知識の増大に伴い、異世界訪問の神話は科学的な情報に取って代わられてきた。そうした知の形態の変遷は地域によって時代差がある。古代ギリシア・ローマの場合については科学的な報告と神話的な異世界譚の両方が見られる。その際、以下に示すように、当初は科学的な記述であったものが時代を経て神話的な表現で伝えられたことも、その逆に神話的な異世界譚が歴史的人物の事績として伝えられることもあったろう（Cary & Warmington 1929）。

陸路で世界の涯迄行ってさまざまな不思議な世界を訪問する神話としては、アレクサンドロスを主人公とした伝カリステネス『アレクサンドロス大王物語』がある。海洋民族の異界の島訪問神話として最も有名な例は、ギリシアの『オデュッセイア』であろう。同じギリシアの『アルゴ船の冒険』、『アラビアンナイト』中の「シンドバードの冒険」、ケル

トの『マールドゥーンの航海』などもこの異界の島々訪問の範疇に属する。航海だけでなく天上世界への旅も含む複合型の異界訪問神話としては、ルキアノス「本当の話」がある。

もっと多くの例をあげることも出来るだろうが、ここでは主に日本の例について考察し、異界の島々訪問のモチーフの伝播の可能性を検討する。そしてそれによってユーラシアにおける人々と神話の移動の歴史を跡付けるといふより大きな計画の一つの構成要素を作り出すことを目指す。最初に、日本における異界の島々訪問神話として「百合若大臣」と「御曹司島渡」の二作品を検討し、両者がともに『オデュッセイア』の影響を受けて成立したが、その影響の形は異なることを示したい。続いて、他地域の異界の島々巡航の物語を紹介し、それらのうちで、「シンドバードの冒険」には『オデュッセイア』からの影響が明らかだが、その他の三作品（『マールドゥーンの航海』、『アレクサンドロス大王物語』、「本当の話」）においては『オデュッセイア』からの影響は認めがたいことを示したい。そして日本の二作品はこれら海外の三作品とは明らかに異なっており、独自の発展や展開の結果として考えるよりも、「シンドバードの冒険」と同様に、『オデュッセイア』からの影響を受けて成立したと想定する方が妥当であると結論づける。

### 「百合若大臣」

幸若舞「百合若大臣」のあらすじは以下のものである（荒木他 1979：113-138、福田 1989：60-62。強調は比較において重要となる要素）。

嵯峨天皇の時代、左大臣公光公は子供のいないことを嘆き、長谷の観音に日夜熱心に祈願し、男子が授けられた。夏の半ばの若子なので百合若と名づけられた。成長するにつれて弓に長けた勇武の若者となり、その名は近隣にも響くようになる。やがて春日姫という美しい嫁を迎え睦まじく暮らすが、地方の国司に任じられる。百合若は、日本へ押し寄せてきたムグリ（蒙古）の大軍討伐を命じられる。ムグリを追い払った百合若は、大陸へ渡り、高麗でムグリの大軍を打ち破る。ムグリとの戦闘は、百合若の勝利に終わる。戦いに勝った後、信頼している別府太郎ら部下に裏切られ島に一人置き去りにされる。別府太郎らは帰国後、天子に百合若は病没したという虚偽の報告をして国司の栄誉を得た。夫を失った姫に太郎は求婚を迫るが、夫の死を信じられぬ姫は百合若の愛鷹緑丸を放つ。緑丸は百合若の元にたどり着き、百合若は妻に血で手紙を書いて緑丸を送り返す。妻は次には硯や筆・墨を入れた袋を緑丸の脚に結びつけて空に放つが、重さのために緑丸は海に落ち、その亡骸が百合若の元に漂着する。百合若は壱岐の船を掴まえて帰還し、正体を隠して太郎のもとに仕え、復讐の機会をうかがう。やがて競射の日が来て、得意の弓術を披露するチャンスを得た百合若は自分を裏切った太郎に復讐を果たす。その後百合若は妻との再会を果たし、国司の位も取り戻した。

比較：『オデュッセイア』とは以下の諸点が共通であり、細かな伝播の過程は明らかに出来なくても、『オデュッセイア』の筋書が「百合若大臣」の基になっていることは明らかと思われる。

- ①最愛の妻と戦さのために別れる
- ②海を越えて敵地に赴いて戦闘する
- ③一人で孤島に残される
- ④妻に求婚者が現われるが、妻は夫の帰還を信じて待つ
- ⑤夫は密かに帰還するが、変装して正体を隠して復讐の機会を窺う
- ⑥動物が主人と分かる（老犬、鷹の緑丸）
- ⑦老女が主人と分かる（エウリュクレイア、産婆）
- ⑧自慢の武器である弓を手に入れ、妻への求婚者を退治する
- ⑨妻との再会
- ⑩以前の地位と財産を取り戻す

以上の顕著な一致から考えて、『オデュッセイア』が十六世紀の半ばにイエズス会士によって日本に紹介されて、そこからインスピレーションを受けて成立したとする坪内逍遙の唱えた説は十分に成立すると思われる（Hibbard 1946; Araki 1978）。もちろん、反対意見も少なくない（諸学説の紹介として、井上 1998; 福田 1989 : 62-74 がある）<sup>(1)</sup>。

### 「御曹司島渡」

次に源義経（1159-89）を主人公とする御伽草子<sup>(2)</sup>の一編「御曹司島渡」を検討する。よく知られているように、義経は幼時に平家の追跡を逃れ、奥州平泉の藤原秀衡のもとで育つ。後に兄頼朝とともに平家を打倒するが、頼朝に疎まれて、奥州に戻るが藤原氏とともに滅ぼされる。そうした彼の生涯は『平家物語』に詳しいが、「御曹司島渡」は若い義経が鬼の住む異界の島に渡って、平家打倒のための経典を入手するという異界の島訪問神話である。まず以下にあらすじを示しておく（原文は市古：105-129。大島 1983 は原文と現代語訳。他に金沢 2012 や黒田 1996 も参照した）（強調は重要な要素）。

冒頭、義経は秀衡に平家打倒の相談をする。これに対して秀衡は、日本は神仏の国なので、武士の力だけによるのではなく、神仏の力も借りなければ平家打倒は難しいだろうと言い、その力を持つ巻物について教える。これによれば、北に「千島」あるいは「糸ぞが島」という国があり、そこには「きけんじゃう」（喜見城）という都があり、「かねひら大王」という者が「大日の法」という巻物を持っているが、これは現世では祈祷の法、後世では仏法の法となる兵法で、これを実践するなら日本の国は思い

通りになるから、是非とも入手するがよいというのである。これを聞いた義経は秀衡に暇乞いをして、「四国土佐のみなど」<sup>(3)</sup>に着いて、船頭から船を入手し、神仏に航海の無事を祈願して出航する。途中、「こんろが島、大手島、ねこ島、いぬ島、まつ島、うし人島、おかの島、とら島、かぶと島、たけ島、もろが島、ゆみ島、鬼界が島、蛭が島」などを多数の島を通り過ぎ、七十五日で「きようがる島」に着く<sup>(4)</sup>。上陸して渚にいと、身の丈十丈（約三十メートル）もの巨人が二三十人現われる。腰から上は馬で、下半身は人であり、腰の辺りに太鼓を着けている。義経が島の名前を尋ねると、①「王せん島」、「馬人島」という。またなぜ腰に太鼓を着けているのか尋ねると、背が高すぎて、倒れると一人では起き上がれないので、助けを呼ぶために着けているのだとの答えであった。そこから再び航海して、八十日ほどで別の島に着く。三十人ほどの裸の男女が迎えた。島の名前を尋ねると、②「かしま」、「はだか島」だという。またそこから七十二日ほどの航海で、③「女ばかりの島」、「女護の島」に着いた。女たちに殺されそうになるが、笛を吹いて女たちを魅了して難を逃れた。どのようにして女だけで子を儲けるのかと尋ねると、南にある南州という国から吹いてくる南風を受けると身ごもるが、生まれてくるのは女の子ばかりであると答えた。義経は男たちがやがて来るからと嘘を言って出航する。三十余日で次の島に着く。身の丈は一尺二寸と扇の高さほどである。三十人ほど出てくる。島の名前を問うと、④「小さ子島」、「菩薩島」だと答える。菩薩島と呼ばれるのは、日夜三度ずつ南方の極楽世界から二十五の菩薩が管弦を奏して影向（出現）するからだという。だからこの島では人の寿命も八百歳と長いというのだ。義経は後ろ髪を引かれる思いでまた航海に旅立ち、九十五日の後に到着した島では二三十人の男たちに取り囲まれて、手にした「てんくわの棒」や「附子の矢」などの武器で殺されそうになる<sup>(5)</sup>が、またしても笛の音色で魅了して、死を免れる。島の名を問うと、⑤「蝦夷が島」であると教えらる。そして目指す⑥「千島の都」（喜見城）はそこから順風なら七十二日の行程と教えられ、再び船に乗って都にたどり着く。「かねひら大王」の内裏は鉄の築地で囲まれ、牛頭・馬頭、阿房羅刹といった鬼どもが警備している。鬼たちは義経を見つけると餌食にしようとする。背丈は十丈、頭には十二の角を持っている。義経はここでもまた笛を吹き、その音色で死を免れ、鬼たちが大王に奏上し、大広間で大王と面談することになる。大王は五色で身の丈十六丈（約四十八メートル）、八つの手足に三十の角を持ち、百里（約四百キロ）先まで響きわたるような大声をしている。義経が笛を吹くと大王は上機嫌となり、島に来た理由を問う。義経が大日の兵法を知りたくて来たと言ふと、大王は、それは厳しい精進の後に初めて与えられる、葦原国（日本）の犬太の太郎坊は自分の弟子だが、彼もまだすべてを学んではない、もし義経がその途中の部分まで太郎坊に習っていて、それをここで語ることが出来れば、弟子にしてもよいと語る。義経は毘沙門天の化身で文殊菩薩の再誕であり、鞍馬山で育ったので、見事に巻物の内容を語ったので、大王も感心して師弟の契りを結ぶ。

さまざまな巻物の内容を教えられた後、大王は一旦去り、人間の姿に変じて再登場して酒盛りを始める。そこで義経に笛の演奏を命じ、娘の「あさひ天女」も同席させる。義経と天女は一目で相思相愛となる。義経は天女に大日の兵法を知りたいと打ち明けると、天女はそれが丑寅（北東）の方角、七里の奥に壇を築いて注連縄を張り、石の蔵に納めた金の箱の中にあり、とても見るのは不可能と答える。しかし義経がさらに願うと、天女は父の大王からの勘当を覚悟で奥地の石の土蔵へと赴き、兵法の記された巻物を持ち帰る。義経はこれを三日三晩で書き写す。しかし不思議の兵法なので、書き写すに従って、元の巻物は白紙となっていく。これでは大王に知られるのは時間の問題であるとして、天女は義経に葦原国に戻るようにと訴える。義経は天女と共に逃げるように求めるが、天女はそれは無理として、追っ手に追われた時に逃げおこせる各種の法を教える。

義経が大王の内裏を抜け出すと、異変が起きて、大王に兵法を盗んで逃亡したことが知られる。千人ばかりの鬼が義経を追跡するが、教えられたさまざまな法を使って追っ手を阻み、往路では四百三十数日かかった船路を帰路は「早風の法」を行ってわずか七十五日でとさの湊に戻り着く。

鬼たちが義経を見失って引き返して大王に報告すると、大王は天女のしわざと怒って、彼女を八つ裂きする。天女はじつは相模の国の江の島の弁財天の化身であった。義経を憐み、源氏の世をもたらすために鬼の娘に生まれ変わって兵法を教えたのである。

義経は奥州に戻って秀衡に兵法の巻物を入手したことを報告する。そして兵法の威徳で源氏の世を実現する。

比較：「御曹司島渡」は前半の島渡り伝説と後半の経典の入手の二つに大きく分かれる。『オデュッセイア』からの影響が考えられるのは前半部である。前半部の島渡り伝説について島津久基は、それ以前の類例として、①『今昔物語』31-12「鎮西人至度羅島値虎語」、②同31-16「佐渡国人為風被吹寄不知島語」、③同5-1「僧伽多羅五百商人共至羅刹国語」を挙げている（島津：239-240）。

①31-12「鎮西の人、度羅島に至ること」は、九州から船で旅出た人が大きな島を見つけ、一度は上陸するが、大勢の人間が現われたので、危険を感じて再び船に乗って逃げた。故郷に戻って、島の話をする、と、古老からそれが度羅の島であり、住人は、姿は人だが食人鬼であると教えられた、という内容である。なお、日本古典文学大系本の頭注は「直接の典拠は未だ詳らかでない」としている。

②31-16「佐渡国の人、風の為に知らぬ島に吹寄せられること」は、題名の通り、船が強風で島に吹き寄せられる。島には巨人が住んでいて、島には理由は述べないが上陸しない方がよいと語り、風が穏やかになったら、故郷に戻るがよいと言って、食物を与えてくれるが、それも巨大であった。一行は無事に佐渡に戻り、島の住民に日本語が通じたので

外国ではないのだろう、これはつい最近の出来事である、と結んでいる。日本古典文学大系本の頭注はこちらについても「直接の典拠は未だ詳らかでない」としている。

③5-1「僧伽羅・五百人の商人と共に羅刹国に至ること」では、天竺の僧伽羅が五百人の商人と南洋に出たが、逆風で見知らぬ島に着く。多くの美女が出迎えてくれ、幸せに暮らすが、女たちが毎日、長時間昼寝をするので、僧は奇妙に思い、その昼寝の時間に秘密の建物に近づき、そこに前の船でたどり着いた男たちが幽閉されていて、彼らは女たちに次々と食われていること、そして僧たちも次の船がくれば、同じ運命になることを告げられる。そこで僧と商人たちは逃げ出そうとし、浜辺に出て一心に観音に祈ると、浪間から一頭の巨大な白馬が出現し、彼らはそれにすがって逃げようとする。すると女たちが現われ、最初は戻るよう嘆願するが、無駄と分かると鬼の正体を現す。彼らは南天竺にたどり着き、最後には僧が軍勢を率いて島の鬼たちをことごとく退治して、自ら島の支配者となり、島は僧伽羅国と呼ばれた、と結んでいる。これについて日本古典文学大系本の頭注は、「出典は、大唐西域記卷第十一（中略）。宇治拾遺物語卷六（9）（中略）は本話と一致」としている。

5-1は頭注のように『大唐西域記』卷第十一、一 僧伽羅国、三 仏典の建国伝説、を典拠としている。そしてこれ自体も本性譚（ジャータカ）196番「雲馬前生物語」Valāhassa-jātaka（前田:16-19）をはじめとする仏教諸経典に遡るという（一覧は玄奘:344、注2）。なお、『大唐西域記』は七世紀（646年）の作である。

以上から、「御曹司島渡」以前の異界の島についての物語には複数の島を訪問するという形式は見られないことが確認できる。そこから複数の異界の島を巡るという形式は、『オデュッセイア』あるいは「百合若大臣」の影響による可能性が考えられる。

### 「海のシンドバードと陸のシンドバードとの物語」

次に『オデュッセイア』からの影響がより鮮明な例として、『アラビアンナイト』中の「海のシンドバードと陸のシンドバードとの物語」（五百三十八夜—五百六十六夜、前嶋:11—169）を検討する。以下では航海毎に『オデュッセイア』のモチーフから影響を指摘する形式で論述を進める（Grunebaum 1953; Comhaire 1958; Tuczay 2005; 松村 2014b）（強調は重要な要素）。

1. 第三の航海では難破して漂着した島には巨人がいて、シンドバードたちを殺しては鉄の焼き串に刺して料理して食べる。シンドバードたちは巨人が寝ている間に焼き串を火に入れて真っ赤に熱してそれを巨人の目に突き立てて、盲目にして、準備しておいた小舟に乗って島から逃げ出す。しかし巨人はもう一人の仲間の女巨人を連れてきて、二人して小舟に向かって巨石を投げつける。このため多くの者が石に打たれて死に、生き残ったのはシンドバードの他には二人だけであった（第五百四十六夜—第

五百四十七夜)。

比較：人食い巨人とその目を灼熱した棒で潰す場面は、『オデュッセイア』第9歌の一つ目巨人キュクロプスとその洞窟からの脱出が主な出典となっている(9.233-394)。ただし、巨人たちの投げる石によって船中の多くの者が死ぬ場面は、第10歌のライストリュゴネス人の島での投石によって人が死ぬ場面が基になっていると思われる(10.122-123)。またこの島の巨人たちは「屠った者たちを魚のように串刺しにして、忌まわしい食事にしよう」と持ち帰って行った(10.123-124)とされている。第9歌のキュクロプスはオデュッセウス一行を食べる際には焼き串は用いていないし(9.287-293)、逃げ出した船に二度にわたって巨石を投げつけるが、船には当たらず、死者は出ていない(9.480-489, 537-542)ので、食人に際して焼き串を用いることや、船への投石による死者の場面については、第10歌からの借用を想定するのが妥当であろう。

2. 第四の航海では難破して漂着した島で黒人たちに捕えられ、怪し気な食物を与えられる。シンドバードは用心して食べなかったが、食べた者たちは思慮分別が鈍ってしまう。さらにココヤシの油を飲ませられたり、身体に塗られたりすると、まったく思考能力がなくなり、食欲はますます増大して、でっぴりと肥満する。この国の王はグール(食人鬼)で、屠殺させた人間を、焼きもしなければ料理もしないでそのまま食べてしまう(第五百五十一夜)。

比較：食人鬼のモチーフは前述の第三の航海と同じだが、さらにもう一つの、何かを撰取することで本来の自分を失うというモチーフは、『オデュッセイア』第9歌のロトパゴイ族や第10歌のアイアイエの島の魔女キルケの場面に由来すると思われる。

ロトパゴイ族の島ではオデュッセウスの仲間たちに美味なロトスが振る舞われるが、この実を食べると、「復命することも帰還することも念頭から消えて、ロトスの実を齧りながら、ロトパゴイ人の許に住みつきたい、帰国などはどうでもよいという気持ち」になってしまう。そこでオデュッセウスは慌てて仲間たちを無理やり船に乗せて島を去る(9.83-104)。

またキルケの島では、オデュッセウスの仲間たちはキルケに勧められるままに、チーズと小麦粉と黄色の蜂蜜とをブドウ酒に混ぜ、さらに記憶を喪失される薬を混ぜた飲み物を飲むと、キルケの杖で叩かれる。すると心はそのままだが、姿は豚に変わってしまい、豚小屋に閉じ込められてしまう(10.233-240)。

3. 第五の航海では、雛鳥を殺されたルフ鳥の落とす巨岩によって船は沈められ、シンドバードは板子に馬乗りになって一人だけ助かり、近くの島にたどり着く。しかしその島には老人がいて、親切心から肩に乗せて川を渡してやると、降りようとせずに

乗り物としてこき使うので、シンドバードはヒョウタンの中身をくり抜いて中にブドウの汁を入れて発酵させて酒を作り、それを飲んで憂さ晴らしをしていたが、老人もそれを欲しがったので飲ませると酔っぱらって寝込んでしまったので、肩から外して、石塊で頭をたたき割って殺す（第五百五十六夜—第五百五十八夜）。

比較：『オデュッセイア』第12歌では、オデュッセウス一行は太陽神の島に漂着するが、食料がなくなり、禁止されていた太陽神の牛を食べてしまう。太陽神の牛を殺して食べた罰として彼らの船はゼウスの起こした嵐のために沈められ、オデュッセウスは折れた帆柱に跨って漂流し、一人だけ生き残ってカリュプソの住むオギュギエ島に漂着する（12. 260—449）。第五の航海の前半部は、『オデュッセイア』のこの個所に由来するモチーフであろう。

また酒を飲ませて酔わせて難関を脱するというモチーフは、第三の航海の個所でも述べた、オデュッセウスが食人鬼の一つ目巨人キュクロプスに対して、持参の強いブドウ酒を勧めて酔わせて寝込んだところを仲間とともにオリブの丸太で一つ目を潰すという個所に由来すると思われる（9. 347—394）。

4. 第六の航海では船が岩山に激突して沈没し、島に流れ着くが、島には食料が乏しく、仲間たちは次々と餓死する。そして生き残っているのはシンドバードだけになる。彼は筏を組んで、一か八か地下に潜っていく川を下って行く。途中で気を失うが、気がつくと海岸にたどり着いている。親切な人々に案内されて国王のところに連れて行かれて王に拝謁する。王はバグダードに戻る船を探してくれる（五百六十夜—五百六十二夜）。

比較：『オデュッセイア』第5歌では、神々の会議においてオデュッセウスの帰国が認められ、彼は筏を組んでカリュプソの島から海に乗り出す。しかし彼を恨む海神ポセイドンに見つけられ筏は破壊されるが、かろうじて船材の一つに跨り、パイアケス人の島に漂着する。そして同第6歌では、海岸に仲間の乙女たちと洗濯に来た王女ナウシカアに嘆願して、町に連れて行ってもらう。そして同第7歌では王と王妃のもとに連れて行かれて拝謁する。同第9歌から第12歌においては、オデュッセウスはトロイアを船出してからの苦難の物語を語る。そして第13歌では王はオデュッセウスに船を用意して、故郷のイタケ島に送り届けてくれる。

5. 第七の航海では船が暗礁に衝突して砕け、シンドバードは板子に馬乗りになって漂流し、島に漂着する。前回の航海を思い出して筏を作って川を下り、大きな都の川岸にたどり着く。この都に長く住み、妻も娶ったが、町の住民がサタンの兄弟だと分かって、妻とともにバスラに向かう船に乗り込んで帰国する。七回目の航海に出てか

ら二十七年経っていた（五百六十三夜―五百六十六夜）。

比較：板子に馬乗りになって漂流するモチーフは第五の航海と同じ。筏を作って脱出するのは第六の航海と同じ。そして第七の航海での二十七年の年月というのは、オデュッセウスがトロイに向けて旅経ってから帰還するまでの二十年という数字を意識したものかも知れない。

以上、『アラビアン・ナイト』の「海のシンドバードと陸のシンドバードとの物語」は『オデュッセイア』を十分に意識して活用して編まれていることが確認できる。また、七百五十八夜から七百七十八夜にかけて、「サイフ・アルムルークとバディーア・アルジャマールの物語」Sayif al-Mulūk and Princess Badī'at al Jamāl という長大編が語られているが（池田：88―186）、こちらにも「海のシンドバードと陸のシンドバードとの物語」と似た、『オデュッセイア』に由来するモチーフが複数認められる<sup>6)</sup>。それらのモチーフがシンドバードの物語と『オデュッセイア』とどのような関係にあるのかについては、今後さらに検討が必要である。

### 『マールドゥーンの航海』

多くの不思議な島々を巡る物語はアイルランドにもある。これまでの日本とインド洋の場合からすれば、西のケルト世界においても『オデュッセイア』の影響が異界の島々を巡る神話から検出できると予想される。そこでここでは、もっとも内容が豊富な『マールドゥーンの航海』(*Immram curaig Maele Duin*) (8世紀頃成立?) を検討してみたい（以下のあらすじは松村 1997：7―17 に拠る。またケルトにおける航海譚（イムラヴァ、immrama）一般については、Rees & Rees：314-325; 鶴岡：196―219 を参照）（強調は重要な要素）。

物語はアラン島の戦士が他国に侵略に出かけ、その地で女子修道院の修道院長の尼僧を強姦し、その結果として子供が生まれることから始まる。父の戦士はほどなく敵の襲撃に遭って亡くなる。子供はマールドゥーンと名づけられ、尼僧から親しい王妃のもとに預けられて、王妃の三人の実子とともに成長する。彼はやがて出生の真相を知ることになる。そして父殺しの相手への復讐のためにドルイドに相談をして、その指示に従って船を建造し、十七人の乗組員とともに出航する。ところが三人の里子兄弟たちが同行するといつて海に飛び込んだので、止むを得ず彼らも航海に連れて行くことになる。

1. 殺害者の島：出発から二日目、ある島からマールドゥーンの父を殺した者が殺害を自慢する声が聞こえるが、嵐のために上陸できない。
2. 巨大なアリの島：三日目、子馬くらいの巨大なアリの大群がマールドゥーンたち

を食べようと襲いかかってきたので、島を離れ、三日三晩逃げ続けた。

3. **大きな鳥の島**：たくさんの鳥のいる島があったので、上陸して調べるが、特に何もなく、数羽の鳥を捕えて船に持ち込んだだけであった。

4. **馬の形をした怪物の島**：漂流してたどり着いた島には、馬体で犬の足をした怪物がいた。一行が船に引き返すと大きな石を投げてきた。

5. **巨大な馬が疾走する島**：二人が島に上陸するが、帆のように大きな足跡や風より早く走る馬を見て船に戻った。それは悪霊たちの競争だった。

6. **鮭の家の島**：一週間飲まず食わずでたどり着いた島には崖に面して無人の家があった。そこには波が寄せると沢山の鮭が飛び込んできた。また各人に酒と食事と寝台が用意されていた。一行は神に感謝を捧げた。

7. **不思議な果実の島**：長い航海で飢えに苦しんでいると島を発見し、マールドゥーンが一人で上陸した。島の中央には一本の**林檎**の木があった。この魔法の林檎は全員の四十日間の食糧となった。

8. **体を回転させる野獣の島**：次の島では体の肉骨と毛皮が別々に回転する獣を見た。獣はマールドゥーンたちに気づくと、船で逃げる彼らに石を投げてきた。

9. **戦う馬たちの島**：この島では馬の形をした動物が互いに傷つけ合い、血の海となった。一行は早々と退散した。

10. **獐猛な豚と黄金の林檎の島**：飢えと渇きの後、黄金の**林檎**のなる美しい島に着いた。林檎は日中には豚が貪り食い、夜には鳥たちが食べた。焼けつくように暑い島で一行は島に滞留出来ず、夜間に上陸して林檎を取ると島を離れた。

11. **監視猫の島**：林檎がなくなり、飢えと渇きに苦しんでいると島を見つけた。上陸して一番大きな家に入った。そこには彼らのために食物、酒、寝台が用意されていた。部屋の中央には四本の円柱があり、その上を猫が跳びまわっていた。マールドゥーンの里子兄弟の一人が壁から首飾りを取ると、猫が飛びかかり、彼は燃えて灰となってしまった。マールドゥーンは猫をなだめ、首飾りを元に戻し、灰を岸辺に投げて島を離れた。

12. **羊と枝の島**：この島には白と黒の羊の群れがいて、大男が羊を分けていた。別の色の羊でも、もう一方の群れに入れられると毛の色が変わるのだった。マールドゥーンたちは試しに白と黒の枝を二つの羊の群れに入れてみたが、同じように色が変わった。恐ろしくなった彼らは島を離れた。

13. **豚と炎の川と大きな牛の島**：この島には美しい豚の群れがいた。子豚を一頭殺して料理して船に持ち込んだ。川に槍を入れると火で燃えたように消えた。また角のない大きな雄牛を見た。

14. **水車の島**：この島には大きな水車があった。

15. **嘆き泣く者たちの島**：次の島では人々が嘆き叫んでいた。籤で誰が上陸するかを決めるとマールドゥーンの里子兄弟の残りの二人となった。上陸した彼らもまた島の

人々のように泣きはじめた。二人を連れ戻そうとして上陸した次の二人も同じように泣きはじめた。今度は四人を連れ戻すため、四人が島の空気を吸ったり島を見まわしたりしないようにとマールドゥーンから注意を受けて上陸した。彼らは後から上陸した二人だけを連れ戻すことが出来た。

16. 四つの柵の島：次に金、銀、銅、水晶の四つの柵で仕切られた島に着いた。それぞれの中に王、女王、戦士、乙女の集団がいた。一行は乙女たちに三日間もてなされたが、目が覚めると島も乙女も見えず、海上の船の中にいた。

17. ガラスの橋の島：次に青銅の扉を持つ要塞の島に着いた。ガラスの橋が要塞にかかり、不思議な乙女に出会った。目覚めると彼らは海上の船の中にいた。

18. 鳥の歌う島：次の島にはさまざまな色をした鳥が無数にいて、叫んだり、話したりしていた。

19. 巡礼者の島：次の島では長い白髪で体を被った巡礼者がいた。一行は天使から食物を与えられ、泉から湧き出る酒を飲んだ。島を出るとき巡礼者は彼らのうち一人を除いて全員国に戻ることが出来ると予言した。

20. 不思議な泉の島：次の島にも一人の巡礼者がいて、自分の髪で体を被っていた。泉からは教会暦に従って乳漿水、ミルク、ビール、葡萄酒が湧きだした。ここでも天使に食物を与えられた。

21. 巨人の鍛冶屋の島：この島に住む巨人の鍛冶屋は、マールドゥーンたちの船が近づくと鉄の塊を投げてきた。すると海が炎上したので、急いで遠ざかった。

22. ガラスの海：緑の水晶のような海に出た。

23. 雲の海：雲のような海に来た。海底に要塞、美しい国、怪物などが見えた。

24. 予言の島：波の下に島が見えた。マールドゥーンたちの船が近づくと島の住民の一人の大女が下から木の実を投げてきた。マールドゥーンたちはそれを拾い集めて島から離れた。

25. 水のアーチの島：この島の一方の岸辺からは川が噴き上がり、虹のように弧を描いて反対側の岸辺に流れ落ちていた。その下にも濡れず、槍で大きな鮭を指すことも出来た。おびただしい数の鮭が地面に落ちていたので集めて船に積み込んで島を離れた。

26. 銀の柱と銀の網：海上に巨大な銀の角柱が立っていた。その底も頂も見ることが出来ないほどだった。柱の頂からは網が垂れ下がっていた。

27. 柱脚上の島：次の島は一本の柱脚が支えていた。入り口を探したが見つけられず、そこから去った。

28. 女人の島：次の島には家があり、17人の女子が入浴の用意をしていた。一人の立派な身なりの女性が馬に乗ってやって来た。彼女は女王で、17人はその娘だった。マールドゥーンと17人の仲間は食事と酒の接待を受け、それぞれの寝室で男女の営みをした。女王はこの島では老いることがなく、永遠の生命に与ると言って、マール

ドゥーンに島に留まるように勧めた。しばらくすると帰国したいという仲間が出てきて、彼らは女王の不在の時を狙って、船に乗って島を離れた。すると女王がやって来て、糸巻の毬を投げた。マールドゥーンが受け取ると手について離れなくなった。そうしたことが三度あってマールドゥーンたちの島からの脱出はうまく行かなかった。四度目には仲間のデュランが毬を受けた。そして彼は毬のついた手を自ら切り落としたので、一行は島を去ることが出来た。

29. 酔いを誘う果実の島：次に果実がたわわに実る島に着いた。果汁を飲むと強烈な眠気に襲われ、翌日まで眠ってしまった。マールドゥーンはこの果汁を集めてから島を離れた。

30. 隠者と鷺の島：次の島には巡礼者がいた。また鷺が不思議な果実をつけた枝を咥えて飛んできて、それを湖に入れてから自ら湖に浸かると若返ったので、デュランも湖に入って水を啜ったところ、若返った。

31. 笑いの島：次の島では人々が笑い続けていた。誰が上陸するか籤を引いたところマールドゥーンの三番目の里子兄弟が当たった。彼は上陸すると、住民と同じように笑い出し、戻る気配もなかったので、一行は彼を残して島を去った。

32. 炎の城壁の島：次の炎の城壁がめぐらされた島に来た。城壁は回転し、開いた入口が目の前に来ると、島の人々の姿が見えた。

33. トラハの隠者の島：次に波間に体を毛髪で覆った老人を見た。彼は大きな岩の上で祈っていた。老人はマールドゥーンに、全員が帰国できるだろう、帰路に殺害者の島で父親を殺した男を見つけるだろう、しかし殺してはならず、許さねばならない、と語った。

34. 殺害者の島：航海の最初に上陸しようとしたが叶わなかった島 (1.) に着いた。島の住民の中にマールドゥーンの父親の殺害者もいた。しかし隠者の言葉に従って、殺さずに許した。そしてこの島を立ってマールドゥーンたちは自分の国に戻った。

比較：シード *sidh* やアンヌヴン *Annwfn* といったケルトの他の異界観念 (cf. MacKillop: 340-341, 17; Maier: 248, 17. なお、邦訳のマイヤー 2001 には、アンヌヴンの項はあるが (22)、シードの項が欠落している) に共通する要素としては、鮭 (6, 25)、林檎 (7, 10)、豚 (10, 13) などがある。またキリスト教の影響と考えられる要素としては、天使 (19, 20)、巡礼者 (19, 20, 30)、隠者 (30, 33) などの他、一行が行く先を神に委ねていることがある。「巨人の鍛冶屋の島」の鉄の塊を投げってくる鍛冶屋はキュプロプスを想起させるが、上陸はしていないし、単眼潰しや羊を使つての脱出などの重要な要素も欠けているので、日本の二作品やシンドバードの場合とは異なり、『オデュッセイア』からの影響はほとんどないと考えてよいだろう。

## 伝カリステネス『アレクサンドロス大王物語』

アレクサンドロスの東征については二世紀前半にアッリアノスが『アレクサンドロス大王東征記』を著している（アッリアノス：2001）。これはアレクサンドロス死後五百年近くして書かれたものだが、それでも現存するアレクサンドロスについての著作では史書として最も信頼できるとされている（伝カリステネス 2000:解説 388）。これに対してアレクサンドロスの甥で遠征にも参加したとされるカリステネス著とされる『アレクサンドロス大王物語』は、実際には二世紀から四世紀初頭の間成立したと考えられており、カリステネスによるものでは当然ないので、伝カリステネスとされている（同解説 393）。こちらはアレクサンドロス大王を主人公とした「新しい一般市井の大衆向け読み物」（同解説 394）である。この物語の第一巻と第三巻は非現実的な記述もあるが、歴史的に実在する場所（北アフリカ、ペルシア、エジプト、インド）が舞台となっている。しかし第二巻は完全に空想的な設定で、アレクサンドロス大王は不死を探求して世界の涯まで行こうとしている。以下では、他の異界訪問神話との比較のために、アレクサンドロスが会う不思議な土地や人々にテキストにはないが名前と番号をつけ、末尾にカッコで巻と節を記した（強調は重要な要素）。

1. **リングと巨人の森**：インドからの帰路、大熊座の方向に砂漠を進んでいくとアナパンダという木の森があった。巨大なメロンほどの大きさのリングの果実をつけていた。森にはピュトイと呼ばれる背丈24ペーキュス、首の長さ1ペーキュス半、同じように長い足、そして手と肘までの腕がノコギリのような人間がいてアレクサンドロスたちを襲ってきた。大声をあげラッパを鳴らすと逃げていった（2.32）。
2. **ライオン巨人の地**：次に緑の多い地方に来た。巨人に似た野蛮人が住んでいて、身体が全体に丸く、ライオンに似た火のように赤い顔をしていた。別にオクリタイと呼ばれる人間もいて、頭には毛がなく、背丈4ペーキュスほど、身幅は槍のように細く、ライオンの毛皮をまとい、力が強く、木の棒を持って襲いかかってきて、多くの仲間が倒れたので、森に火を放った。すると逃げて行った。洞窟に行くと入口にライオンのような動物が繋がっていた。またカエルほどの大きさのノミがいた（2.33）。
3. **リング食人の地**：次にメロパゴイ（リング食人）の地に来た。全身毛深く大柄な人間に出会った。裸の女を近づけてみると、女を捕えて食べようとしたので慌てて引き離れた。男が何かつぶやくとそれを聞いて大勢が湿地から現われて攻めてきたので、湿地に火を放った。すると彼らは火を見て逃げた。何人か捕虜として捕えたが、食事には手をつけず、犬のように吠えるだけで間もなく死んでしまった。彼らには人間のようない知恵がない（2.33）。
4. **一日の命の木**の地：河に行きついた。木があり、陽が昇ると成長し、陽が傾くと

萎縮しはじめ、最後には跡形もなく見えなくなった。この木は没薬のような樹脂を出し、大変に香しいので、木を切って樹脂を採取しようとしたが、目に見えない霊によって妨げられ、止めないと全軍が減びると警告されたので、中止した。また河には黒い石があった。これに触れるとその石のように黒くなった。河には蛇や魚も多くいた。ここの魚は冷たい泉の水で煮ることができた。鳥もいたが、触ると火が吹き出た(2.36)。

5. **ロバの地**：砂の多い地方にきた。野生のロバに似た生き物がいた。背丈は20ペキュスだった。目が六つあったが、二つだけを使っていた。気性はおとなしかった(2.37)。

6. **無頭人の地**：次に頭のない人間の住む地方にきた。人間のように彼らの言葉を話していた。この北方人は毛深くて毛皮をまとい、魚類を食べていた。近くで海で漁をして、取れた魚を届けたり、大きな松露を届けてくれた。たくさんの巨大なアザラシが群がっていた(2.37)。

7. **海中の島**：海沿いの地にきた。海中に島があったので、船で調べにいった。海から蟹が現われて兵士を襲った。胸よろいほどの大きさで、甲羅は鉄の武器でも突き通せなかった。槍は前脚で挟み潰された。それでも何とか殺して中を開いてみると、甲羅の中には見事な真珠が七つあったので、海底に真珠があると考え、大きな鉄の檻を作らせ、その中に大きなガラス壺を入れて、その中に入って海底を調べようとした。魚に邪魔されてなかなか海底に達しなかった。三度目には巨大な魚が檻をくわえて引っ張ったので、海上で檻を支えていた四艘の船も魚に引きずられた。大魚は陸地に着くと檻を噛み潰して浜辺に吐き捨てた。こうして海底探索は失敗した(2.38)。

8. **浄福者の地1**：そこから太陽の照らない地にきた。浄福者の地のことを聞き、そこにいってみることにした。霧の深い場所に着き、更に進むと漆黒の闇となった。15スコイノス(伝カリステネス2000:149注2によれば、エジプトの距離の単位で5キロから10キロに相当)の行程を進むと透明に輝く泉の場所に着いた。アンドレアスという料理人に命じて乾し魚を料理させた。料理人はその泉の水で乾し魚を洗ったが、魚は生き返り逃げてしまった。そこで料理人はこのことをアレクサンドロスには報告せずに密かに水を容器に蓄えた。こうしてアレクサンドロスは不死となる機会を失した(2.39)。

9. **浄福者の地2**：さらに230ストイノス行進したが、その間、太陽も月も星も見えないが、光だけはあった。二羽の人間の顔をした鳥が飛んできて、アレクサンドロスに浄福者の島は来るべき場所ではないので、引き返すように忠告した。彼は忠告を聞き入れ、出発点に戻った。帰還した後、料理人が不死の水を飲み、またその水を餌にアレクサンドロスが側女との間に儲けた娘のカレをたぶらかしたことが判明した。そこでアレクサンドロスは二人を追放した(2.40-41)。

10. **浄福者の地3**：アレクサンドロスはここが世界の果てであるか知りたくなる。巨

大な白い鳥がいたが、この鳥は動物の死骸を常食としていたので、死んだ馬を使って、集まってきた多くのこの鳥を捕えた。そのうちの二羽に三日の間肉を与えず空腹にしておいて、輓に似た木組を鳥の首に結わえつけ、それに策に似た牛皮の籠をつけた。アレクサンドロスはそれに乗り込むと、槍の先端に馬の肝をつけて差し出した。鳥は肝を食べようと飛び立った。こうして王は天近くまで上昇したが、人間の顔をした鳥が現われて地上に戻るように命じたが、戻る前に下の世界を見るようにも命じた。王が見ると、巨大な蛇がとぐろを巻き、その大蛇の中央に小さな土地が見えた。鳥人間はその小さな土地が世界であり、大蛇は大地を囲む海だと告げた。王は何とか地上に戻ることができた (2.41)。

これらは以下のようなモチーフに分類できるだろう。①巨人 (1, 2)、②犬のような食人種 (3)、③無頭人 (6)、④北方人 (6)、⑤海中訪問 (7)、⑥世界の果て (8, 9)、⑦人面鳥=鳥人間 (9, 10)、⑧不死の水の泉 (8, 9)、⑨巨鳥 (10)、⑩天上飛翔 (10)。①の巨人には『オデュッセイア』のキュクロプスを思わせる描写はない。⑦の人面鳥はセイレンを思わせるが、破滅させる歌声の要素はなく、浄福者の地の使いとしてむしろ忠告をしている。これまた『オデュッセイア』からの影響とはしがたい。そしてそれ以外の八つの要素は最初から対応するものが見当たらない。

### ルキアノス『本当の話』

ルキアノスは120年から125年ぐらいの頃、ユーフラテス河に臨むシリア東境の町サモサテ (Samosate, Samosata) に生まれた。ローマ帝国においてギリシア語で短編を書いた作家である。おそらくシリア系のセム人であった。アテネで165年から175年にかけて最も活躍し、185年以降に亡くなった。「本当の話」は170年頃の作とされる (ルキアノス1989: 解説8, 457)。以下では、他の異界訪問神話との比較のために、ルキアノスが出会う不思議な島や人々にテキストにはないが名前と番号をつけた (強調は重要な要素)。

ある日ルキアノスは自分と同じような若者50人を集めて、「ヘラクレスの柱」(ジブラルタル海峡) を越えて大西洋に乗り出す。嵐に会い、79日間流されたが、80日目に太陽が現われ、見知らぬ島を見つけて上陸する (I.5-6)。

1. 葡萄と葡萄酒の島: 島には青銅の柱が立っていて、「ヘラクレス及びディオニュソス神来到の地点」と刻まれていた。川には葡萄酒が流れ、川の源泉には巨大な葡萄の木があり、木の根から葡萄酒が流れ出ている。川の中の魚は色も味も葡萄酒そっくりだった。腹を開いてみると酒粕が詰まっていた。次に別の種類の葡萄の木があった。下の方が普通の葡萄の木だが、上の方は女性の姿で、さまざまな言葉で愛想よく話しかけてきた。仲間が油断して触ると離れられなくなり、同じように木にされてしまっ

- た。慌てて船に戻って島から離れた (I. 6-9)。
2. 月：つむじ風で船が巻き上げられ、七日七晩空を駆け、八日目に大きな陸地に着いた。それは月だった。月の王エンデュミオンから太陽の住民との戦いへの加勢を求められ、承知して戦う。戦いが終わって下界の海に戻ることになる。(I. 9-27)
3. 金星：下界に下る途中、金星に寄って飲み水を汲む。太陽のそばも通り、太陽に立ち寄りたいたいという仲間もいたが、通り過ぎた (I. 28-29)。
4. 灯明の郷：人はいなくて、灯明が人のように暮らしていた (I. 29)。
5. 雲井時鳥国：空中に浮かぶ鳥の国の雲井時鳥国 (アリストパネスの喜劇『鳥』) を通り過ぎるが、立ち寄りなかつた (I. 29-30)。
6. 鯨：海面に降り立ったが今度は巨大な鯨が出現し、船ごと呑み込まれてしまう。その腹の中は一つの別世界で、同じように呑み込まれた多くの人々が住んでいた。腹の中にはギリシア人ばかりでなく、「ウナギみたいな目つきに川エビの顔をした」、「生肉を啖う」、「塩魚族」とか、「上体は人間みたようだからだの下はいたちに似ておる」、「トリトノメンデテス」とか、蟹手族、鮪頭族、ざりがに族、鯡足族などもいた。ルキアノスたちは鯨から脱出しようと腹の中で火を焚いて鯨を苦しめ、口を開けて脱出する (I. 30-42; II. 1-2)。
7. 氷の海：激しい北風に吹かれて氷の海に閉じ込められた。氷の中に大きな洞窟を掘って火を燃やして暖を取っていたが、食料も尽きたので、氷から船を引き剥がし、帆を広げて氷上を滑って行って氷のない海にたどり着いた (II. 2)。
8. 無人島：無人島に着いて、水を補給したほか、目の下から角の出ている野牛を仕留めて食料にした (II. 3)。
9. 乳の海、チーズの島：乳の海に入ると葡萄の木でいっぱい白い島があった。上陸するとそれがチーズの島と分かった。葡萄の房を絞ると中は牛乳だった (II. 3)。
10. キルク (コルク) の島と人：牛乳の海を抜けると、海の上を駆けて行く人々を見た。足がキルクで出来ているので沈まないのだ。そのうち、その人々が住むキルクで出来た島があった (II. 4)。
11. 花島 (神仙の島)：次の島からはよい香りがしてきた。島にはさまざまな花が咲き乱れていた。上陸すると守衛や巡邏が現われて、バラの花の紐で縛ってルキアノスたちを総統のところ連れて行った。この島は「神仙の島」(選ばれた死者が行く「幸福者の島」のこと) であると教えられた。出発の際にオデュッセウスからカリュプソへの手紙を託された (II. 5-29)。
12. 悪人の島：罪人が死後送られる島で、花島と対照的。島の周囲は切り立った崖で一本の木も生えていない、岩だらけの荒涼とした風景。罪人の責め場の地面は剣や切杭だらけで、三筋の河が取り巻いている。一つは溝泥、二つ目は血、一番内側は火焰の流れ。しかしその火焰の流れの中には燃えさしや炭火のような灯明魚という魚がたくさん泳いでいた。一番ひどく罰せられているのは本当でない歴史を書いた者どもで、

ヘロドトスもそこにいた。ルキアノスは、自分はどうそを書いた覚えがないので、この島とは無縁だと安心する (II. 29-32)。

13. 夢らの島：花島のそばにある曖昧模糊とした島。「睡眠」という名の港から上陸し、そばには鶏神の神殿と象牙の門があった。島に生えているのは罌粟や曼荼羅華樹のみで、鳥類はコウモリだけだった (II. 32-35)。

14. カリュプソの島オーギュギア：カリュプソにオデュッセイアからの手紙を渡した。島を出発すると、巨大な糸瓜で作った船に乗った「糸瓜の海賊」が襲ってきた。戦っていると、胡桃船人というのも現われた。糸瓜の海賊と胡桃船人は敵同士で戦いはじめたので、その隙に逃げ出した。すると今度は海豚に跨った人間たちが乾燥した鳥賊や蟹の目などを射かけてきたが撃退した (II. 35-39)。

15. 巨大カワセミの巣：周囲が三里もある巨大なカワセミの巣に衝突する。巣にいたカワセミもそれに劣らず巨大だった。カワセミが飛び去った後に上陸したが、巣は巨木を組み合わせて作った筏のようだった。中には五百個の卵があり、それぞれ酒樽より大きかった。手斧で卵を割ってみると、二十羽の秃鷹よりももっと大きなまだ翼のないヒヨコが入っていた (II. 39-40)。

16. 底なしの海と巨大な森：底なしの海の上に根のない木が生い茂る巨大な森にぶつかった。木々は密生していて通り抜けることは出来なかった。そこで一番大きな木に登って向こう側を見ると、森は二里半も続いていて、その向こうに別の大海があった。そこで皆で船を引き揚げ、帆を上げて木々の「海」を航海し、向こう側に着くとまた船を下して航海を続けた (II. 41-43)。

17. 大きな水の裂け目の淵と水の橋：次に地割れのように水と水が裂けている場所に来た。そこに落ちればおしまいが、近くに水の橋が渡されているのが見えたので、櫂を取ってそちらに漕ぎ寄せて、反対側の水に渡ることが出来た (II. 43)。

18. 牛頭族の島：着いた島には角の生えたミノタウロスのような姿の種族がいた。襲いかかってきたので戦って殺し、捕虜にもした。やがて牛頭人の親玉が来て、賠償としてたくさんチーズ、干し魚、タマネギ、四頭のシカを差し出したので、捕虜を釈放した。シカは、後脚は二本だが、前脚は一本にくっついている三脚の姿だった (II. 44)。

19. 奇妙な人間たち：海上に自分が船である奇妙な人間が現われた。水面に横たわり、腹に大きな棒を立て、帆布を張り、両手で帆足を掴んで風を受けて進むのである。次に別の人種に出会った。彼らはキルク板の上に坐り、二頭のイルカをつないで、手綱を取って進むのである (II. 45)。

20. 食人女の島カバルーサ：次に到着した島にはギリシア語を話す女たちがいた。島の名はカバルーサ（「馬のような女」の意らしい。）女たちは乗組員を一人ずつ自分の家に連れて行こうとしたが、ルキアノスは誘いを断って辺りを眺めていた。すると多くの人間の骨や頭蓋を見た。また女たちの足元を見るとロバの蹄の形をしていた。ルキ

アノスは一人の女を捕えて、剣で脅して、彼女たちが「驢馬の脛」と呼ばれる海の女で、他国からの旅人を酔い潰して餌食にして暮らしていることが分かった。そこでルキアノスは女を縛ってから屋根に上って大声で仲間を呼び集めて、逃げ出した (II. 46)。  
21. 大陸：大陸のそばまで来て、上陸すべきか議論していると嵐が来て、船が壊れてしまった。そこで皆、船の端材につかまって陸まで泳ぎ着いた (II. 47)。

ルキアノスが『オデュッセイア』を知っていたのは、14の「カリュプソの島オーギュギア」で明らかだし、11の「花島（神仙の島）」でオデュッセウスからカリュプソ宛の手紙を託され、それを14のオーギュギアでカリュプソに渡している。しかし風刺作家であるルキアノスは『オデュッセイア』を意識しながらも、太陽や月の世界に向かったり、巨大な魚の体内世界に住むといった、それまでになかった空想を展開し、『オデュッセイア』の模倣とは呼べない新しい作品に仕立て上げている（松村 2014a 参照）。

なお、20の「食人女の島カバルーサ」は、「御曹司島渡」の個所で紹介した『今昔物語』巻第五 天竺第一「僧伽羅・五百人の商人と共に羅刹国に至ること」（山田他校注：338-343）およびその出典である『大唐西域記』巻十一・一・三「伝典の建国伝説」（玄奘：341-343）や「ジャータカ」第二篇・第五章・196番「雲馬前世物語」Valāssa-jātaka（前田訳：16-19）と酷似しており、ルキアノスとジャータカは同一の出典に由来すると想定できるだろう。

## 終わりに

周囲を海に囲まれ、異国との交流のために航海を繰り返してきたギリシアや日本やアイランドの人々、そして海洋交易によって他地域と交易を行ってきたインド洋の商人（最初はペルシアであったらしい）は異界の島々を巡る物語を好んだようだ。もちろん、周りに海がない内陸部であれば、陸路で異界の国々を巡る話や天上の世界を巡るタイプの異界訪問話となるのである。

本稿では日本の航海による異界の島々訪問の物語（「百合若大臣」と「御曹司島渡」）が『オデュッセイア』から影響された可能性を検討してきたが、その際に他の類似の物語（「海のシンドバードと陸のシンドバードとの物語」、『マールドゥーンの航海』、『アレクサンドロス大王物語』、「本当の話」）の場合とも比較を行った。似たような状況では似たような現象が生じるのではないかという見通しを検証するためである。そして「海のシンドバードと陸のシンドバードとの物語」の場合には明らかに『オデュッセイア』の影響が認められるが、『マールドゥーンの航海』の場合には、影響関係は認めがたいと思われるという考えにいたった。ケルト世界に『オデュッセイア』が伝わった可能性は日本の場合と同様にあるわけだが、だからといって必ずそれが異世界の島々訪問の物語に取り込まれるとは限らないようだ。

『アレクサンドロス大王物語』の作者（伝カリステネス）も「本当の話」の作者ルキアノ

スもギリシア語で執筆しているので、『オデュッセイア』は当然知っていた。しかし前述のように、『アレクサンドロス大王物語』には『オデュッセイア』を明らかに意識したと思われるモチーフは認めがたい。またルキアノス「本当の話」は、『オデュッセイア』を意識はしていても、模倣ではなく、パロディーとして再活用している。

こうした他地域からの物語のモチーフの伝播を歴史的に跡づけることは容易ではない。これまでも「英雄誕生の神話」、「神剣の神話」などについてモチーフ伝播の過程を検討してきた（松村 2014c、2014d）。そしてそれらについては、陸路で騎馬民族を運び手として伝えられたという可能性を提唱した。それに対し、今回の『オデュッセイア』の異界の島めぐりの神話モチーフについては海路での伝播を考えてみたが、他地域の例との比較によって、日本への伝播の可能性をより説得的に示そうという試みとしては、現段階ではあまり成功したとは言い難いと感じている<sup>(7)</sup>。今後さらに類例を積み重ねていき、より説得的なモデルを提示できるように努めていきたい。

—注

- (1) 坪内逍遙は 1906（明治 39）年に、『早稲田文学』に「百合若伝説の本源」を発表し、『オデュッセイア』が室町時代に日本に伝えられ、それが翻案されたものが「百合若大臣」であると主張した。オデュッセイアのラテン語名 Ulixes「ユリクシス」と「百合（若）」（「百合草（若）」がより古い形とされている）が似ていることや、オデュッセウスの留守の間、妻ペネローペが織物をして時間を稼ぎ、求婚者をかかわす逸話が百合若の妻の行いを思わせること、最後に復讐をする際に主人公のみが引ける強弓が使われることなどがその理由である（井上 1998：245-248）。
- (2) 室町時代から江戸前期にかけて作られた短編の物語草子。五百編ほどあり、内容から①公家物、②僧侶の物語と本地物、③武人伝説物、④庶民の小説、⑤異類物に分類されている。「御曹司島渡」は③の武人伝説物に属する（伊藤他編 1968：208-210）。
- (3) 平泉の義経が四国土佐から船に乗るのはおかしいというので、「四国は後で加えたもので、十三（とさ）の湊（青森県西津軽郡）であろう」（市古：250）とされる。しかし、これは「円環をなす異界の旅」であるとして、「南国のとさの湊で少しも誤りではない」とする意見もある（黒田：156）。
- (4) 「きようがる」とは市古 250 によれば、「風がわりな。へんてこな」。
- (5) 「てんくわの棒—未詳。アイヌの武器か」、「ぶす（附子）はトリカブトの根から取った汁で作った毒薬」（市古：250）。
- (6) ①船団が難破して主人公サイフ・アルムルークと数人の白人奴隷たちだけが生き残る（七百六十七夜）、②たどり着いた島で奴隷の一人が悪魔に肩に乗られ、乗り物にされたので、逃げ出す（七百六十六夜）、③別の島で捕えられるが、筏を作って島から脱出する。しかし巨大なワニが出現して奴隷たちを呑み込み、サイフ・アルムルークだけが生き残る（七百六十七夜）、④主人公の弟で船団が難破して別れ別れになったサーイドは生きていて、主人公と再会し、自分の体験を語る。彼もまた悪魔の棲む島にたどり着き、そこで肩に乗られて乗り物として酷使される。しかし、酒を作って悪魔に飲ませて、酔って寝たところを殺害する（七百七十一夜）、⑤サーイドと白人奴隷たちは羊飼いの食人鬼に出会い、洞窟に誘われ、サーイド以外の二人はミルクと偽った薬を飲まされて盲目にされて食われてしまうが、サーイドは寝ている食人鬼の目を二本の焼串で突き刺して盲目にすると、剣で切り殺す（七百七十二夜）、⑥サーイドは島を通りかかった船に乗せてもらうが、船は難破し、彼一人が板切れに乗って漂流し、助かる（七百七十三夜）。
- (7) 『オデュッセイア』がチュルク系騎馬遊牧民に伝わり、彼らの英雄叙事詩にその影響がみられるという問題については、すでに優れた研究があるので、本稿では取り上げなかった（大林 1991；坂井

## —参考文献

- アッリアノス (大牟田章訳) 2001: 『アレクサンドロス大王東征記 (上・下)』岩波文庫
- 荒木繁他編注 1979: 「百合若大臣」、『幸若舞 1』平凡社東洋文庫 355 所収
- 池田修訳 1988: 『アラビアンナイト』15、平凡社東洋文庫 482
- 市古貞次校注 1985: 『御伽草子 (上)』、岩波文庫
- 伊藤整他編 1968: 『新潮日本文学小辞典』新潮社
- 井上章一 1998: 『南蛮幻想——ユリシーズ伝説と安土城』文藝春秋社、第四章「百合若とユリシーズ」
- 大島健彦校注・訳 1983: 『御伽草子集』(完訳日本の古典 49) 小学館
- 大林太良 1991: 『神話の系譜』講談社学術文庫 (IV16 「百合若伝説と内陸アジア」、186-192)
- 金沢英之 2012: 『義経の冒険——英雄と異界をめぐる物語の文化史』講談社
- 黒田日出男 1996: 『歴史としての御伽草子』ペリかん社
- 玄奘 (水谷真成訳) 1971: 『大唐西域記』平凡社 (中国古典文学大系 22)
- 坂井弘紀訳 2015: 『アルパムス・バトゥル——チュルク諸民族英雄叙事詩』平凡社東洋文庫、862
- 島津久基 1935: 『義経伝説と文学』大学堂書店
- 鶴岡真弓 1993: 『聖パトリック祭の夜——ケルト航海譚とジョイス変幻』岩波書店
- 伝カリステネス (橋本隆夫訳) 2000: 『アレクサンドロス大王物語』国文社
- 福田晃 1989: 「中世の神話的伝承」、君島久子編『[日本基層文化の探求] 日本民間伝承の源流』小学館、40-87
- ホメロス (松平千秋訳) 1994: 『オデュッセイア』上下、岩波文庫
- マイヤー、ベルンハルト (平島直一郎訳) 2001: 『ケルト事典』創元社
- 前田専学訳 1982: 『ジャータカ全集 3』春秋社
- 前嶋信次訳 1981: 『アラビアン・ナイト』12、平凡社東洋文庫 399
- 松村一男 2014a: 「日月旅行記の系譜」、『神話思考 2』言叢社、Ⅲ11 所収、521-536。
- 松村一男 2014b: 「神話学から見たシンドバードの航海」、『神話思考 2』言叢社、Ⅲ14 所収、559-571。
- 松村一男 2014c: 「英雄神話の諸相」、篠田知和基編『神話・象徴・凶像Ⅲ』楽瑯書院、67-80
- 松村一男 2014d: 「剣の英雄神」、『和光大学表現学部紀要』15、73-93
- 松村賢一 1997: 『ケルトの古歌『ブランの航海』序説』中央大学出版部
- 山田孝雄他校注 1959: 『今昔物語』1 (日本古典文学大系 22)、岩波書店
- ルキアノス (呉茂一他訳) 1989: 『本当の話』ちくま文庫
- Araki, James T. 1978: “Yuriwaka and Ulysses: The Homeric Epics at the Court of Ōuchi Yasutaka”, *Monumenta Nipponica* 33, pp.1-36.
- Cary, M. and E. H. Warmington 1929: *The Ancient Explorers*, Methuen.
- Comhaire, Jean L. 1958: “Oriental Versions of Polyphem’s Myth”, *Anthropological Quarterly* 31, pp.21-28.
- Grunebaum, G. E. von 1953: *Medieval Islam*, U. of Chicago Press, Chapter 9 “Creative Borrowing: Greece in the *Arabian Nights*”, pp.294-319.
- Hibbard, Esther Lowell 1946: “The Ulysses Motif in Japanese Literature”, *Journal of American Folklore* 59, pp.221-246.
- Lucian I* 1913, William Heinemann and Harvard University Press.
- MacKillop, James 1998: *Dictionary of Celtic Mythology*, Oxford University Press.
- Maier, Bernhard 1997: *Dictionary of Celtic Religion and Culture*, Boydell Press.
- Rees, Alwyn & Brinley Rees 1961: *Celtic Heritage*, Thames and Hudson.
- Tuczay, Christa A. 2005: “Motifs in the *Arabian Nights* and in Ancient and Medieval European Literature: A Comparison”, *Folklore* 116, pp.272-291.